（郵便物認可）　（本號六頁）　（日曜日休刊）（定價金三錢）

時事新報

時事新報定價
一枚金三錢〇一箇月前金六十五錢〇三箇月前金一圓八十錢〇六箇月前金三圓六十錢〇一箇年前金六圓五十錢〇郵便稅一箇月金廿六錢〇一箇年金三圓十二錢〇左ニ掲グル各地ニ於テハ該地賣捌所ヨリ無料ニテ配達致候（但本紙ヨリ直接郵送スルモノハ此限ニアラズ）
東京、橫濱、橫須賀、神奈川、藤澤、大磯、小田原、熱海、沼津、三島、沒津、清水、靜岡、藤枝、大津、神戸、尼ノ崎、浦山、岡山、倉敷、高梁、廣島、福山、下ノ關、長崎、名古屋、敦賀、岡崎、豐橋、四日市、桑名、津、松坂、山田、宇都宮、高崎、小諸、岩村田、上田、鹿沼、八王子、千住、越ヶ谷、熊谷、行田、戶塚、幸手、加須、鶴宿、千葉、佐倉、東金、八幡、船橋
其他訓地近傍郵便局ノ個所ハ同シク郵便料不申受候
時事新報廣告料（前金）一行ニ付

一行廿四字詰	一日限	二日以上	七日以上	十六日以上
		六日迄	十五日迄	
一行	金八錢	金七錢	金六錢	金五錢
百十行	國七錢	國六錢	國五錢	國四錢
三十行	二厘	二厘	九厘	八厘
九	六錢八厘五毛	六錢	五錢	四錢五毛
八	五錢	五錢	四錢	三錢

第千二百八十號
明治十九年五月二十日　木曜日
舊丙戌四月十七日　（庚辰）
月出（天文年曆）午前四時五十三分
月入午後八時五十八分
滿潮午前六時三十五分
干潮午後七時十六分
（西暦一千八百八十六年）

時事報報

兵士の食物を改良すべき

兵士は國の干城なり近時日本にて兵備擴張の論頻りに行はるゝも畢竟は國の獨立と保ちて外國の侮を禦がんとするの精神あるべし誠に美事にて我輩の贊成する所なれども唯漫に兵備擴張と申すばかりにてはその意味解らず多く軍艦砲銃を造りて戰爭の器械は攻防兩つながら完全なるも實際ふたの戰爭の局に立つべき兵士ろの物が不完全ありせば特んで以て國の干城とは爲し難かふんたれば第一にはその人數を十分にして國防に手不足無からしめ第二にはその訓練と嚴よして精銳敵無きと期するの策を設くる事必要ナレども之を外にして更に緊切なるは兵士の体力を圓滿強壯ならしめ一以て十に當るの實と具備せしめざる可らざる事是あり西洋人は兵士と日本の兵士と相對し日本兵士の微軀薄力なるは爭ひ難き事實なり例へば西洋一般の兵士が荷ふ所のランドセルの如きは日本人にては迚も背負ひ切れざるが故あれを作るにも故さらに其形を小にして小男子の力に應せしむるやう注意せざるべからずと云ふ又西洋人ならば十人にして運搬する大砲なれども日本人にては十五人と要せざるべしと云ふ話は毎々我輩の耳にする所にして今仮りに日本人の力は一に西洋人の力は一半あるものとせば日本六萬の兵は乃ち僅に西洋四萬の兵に敵を得るの勘定なり兵士が体力の強弱は其關係實に容易ならざるものといふべし軍艦兵器は必ずしも數の多きを尚ぶに非ず寧ろ其數は少なくも力に於て大なる時は江東八千の子弟以て强秦百萬の兵と鏖鬪するに足るなり日本にて近來兵備擴張の實の着々歩を進めて緩に宜し三萬餘の常備軍を殖し退て十餘萬と參さんとし軍師團の制を編して全國配兵の區畫を定むる等我れも兵備擴張に一端にて我輩の贊成を表する所なれども此外に兵士の体力を增す事即ち兵士銘々に十分滋養の食料を與へて大に活潑强壯の力を養ふの一策に至りては我輩未だ吾報を耳にする能はず蓋し遺憾の思ひあるあり蒸氣機械なりといへども石炭薪料の以て汽力を保つなければ機械は尚ほ無きに異ならず兵備擴張にたゞ兵士器械の數を增すのみにて他の兵士体力の强弱を圖らざるが如きは恰も蒸氣機械の働を欲して石炭を供給に注意せざるものと一般決して得策とは思はれざるなり

日本兵士の常食は米なり米六合の菜代六錢が通常兵士一日の食料にて大抵一日の食費十二錢内外に當るといへり此費額は十餘年以前に定まりたる儘にして爾後著しき變化無く兩三年來兵備擴張論の盛んなるにも拘はらず食費改正は一項を來さず大ふ人の注意と意かざるものゝ如き依て先づ我輩は此食費額に若干の割增を與へ肉食の法を盛んにして今の菜食を廢止するれ工風最も大切ならんと信ずるあり

食物の滋養質は野菜に少なく多く肉類に多し之を今改めて盲ふと要せずといへども食物の改良を實行する當たりて先一概に滋養の多寡を論ずべからざるの次第なれども知らざるべからず蓋し食物は唯單に滋養一邊と以て濟むべきものに非ず体に養ひ益なく兼て又口に旨く滋養と甘味と併合兩立して人始めてその物を食すれば若し人間がたゞの滋養品を喰ふふのみにて滿足するものならば人体支持れ原質たる酸素二素を一定の配劑分量に調じ合いせ藥品としてこれを服用するばかりにして生命も繫がり筋力も增し併く人生の快樂を亨け得て不足なしといふの奇談あるべしといへども人間食慾の事は到底化學分析の力にては制し難況ものもの矢張りこれと嗜慾に訴へ徐々その改良を計らざる可らず故に我輩が今日兵士の食料と滋養の多き品々を改めよと主唱するに當りても全く滋養の一邊に偏して他の一方の甘味如何を放擲するものに非ず特に食物改良の途に横はる障碍は獨りこれに止まらず即ち一般人の習癖あるものありて日本人が米を喰ひ蔬菜を喰らふの習慣は祖先幾代の昔より傳來せるものなれば費額の增加あり今日一人一日の食費十二錢位のものにても尚ほ其費用の少おからざるが爲めに十分の兵員を養ふこと能はざるを憂ふる折柄如何ですると更に增額するの工風なんやと論議する者あれども我輩い此論を服せず何となれば食費增額の工風は如何様ふも付くべく實費金の出所なくば兵員は幾分を減じく食料に不足なからしむるの工風もあるふと信ぜればなり併しながら仮りふ食費い今のまゝ据置くものとして此費額の許を限り食料と改良する工風も亦甚だ大切なるものに付參考の爲め愛ふ一と通り其次第を述ぶべし或人の說ふ依れば東京鎮臺府下駐營の兵士大數四千足らざれ人に憑く牛肉を喰らひそものとしく概算すれば中等肉一斤の價六錢に昇らずして充分ふれが供給を爲すこと容易なるが故兵士一名日に八十匁の肉を食すとすれば其代價四錢内外にて濟むべしと云へり目下鎮臺兵の常食なるものい前にも記せし通り一日の菜代六錢許ふして而して其實品如何ふといふに重に野菜類にしてたゞ時に魚肉の賄あるに過ぎずと聞けり今此六錢と野菜の代りふ肉ふ消費するとせば割烹費用を合はせ日に何十匁の肉は尋常兵士の口腹に入るゝのことを得るならん又我輩が東京鎮臺歩兵第三聯隊に於く實地ふ試驗したる蒸餅米飯損益比較表あるものを見るに（蒸餅といふ小麥粉を以て製ふたる麵包の一種ふてうの習稍々硬ふ）一食二合の米飯と同く半斤の蒸餅との費用に於くい蒸餅に四厘八毛餘の低廉と見るこれを一日三食に乘ずれば蒸餅の利得一日金一錢四厘五毛餘に當るが故ふを以て菜代を補給するふば各人良菜を得べしとあり又或人が私に兵食改良の考案を立てたるその大意なりといふと聞くに差當り一人の費額を今の一日十二錢に豫算し悉皆兵士と洋食者ふて何れはどまでの食品と與へ得るやといふにパン一日一斤半、朝ハッピふ野菜、晝夕の兩度は肉各三十匁ゝこれに馬鈴薯野菜類を多量に調和し例へばビーフステッキ、カツレツの類一品づゝ外ふ若干のバタ等を給する易しとあり若し此等の計算ふて實地に大差なきものとせば兵士の食料改良は案外に手輕き仕事ありと謂せざるを得ず現んや今のまゝふ食費の定額と据置て萬一不足れ事もあらば勇に幾分の增額と爲すも決して苦しからざるに於てとや兎に角に兵士の食料改良は兵備擴張れ精神に悖らず又これと實行するの工風ふるも乏しからずとする以上は最早これを猶豫せるの要なるべしと信ずるあり

雜報

○電氣劍　上海在留の外國人某は久しく試驗を積みたる後此程電氣劍なるものを發明せしが其製方を聞くに劍は通常の軍用サベルにて其長さ丈け ふ細き白金の線を入れ之を佩るものは小さ兄強力なる貯電池を腰の邊に着け之れより鐵線にて電氣を劍ふ傳ふる樣に爲ち置き敵と戰ふふ當り僅に一つのボタンを推せバ電氣忽ち劍端ふ傳はり敵兵荷も之ふ觸るゝ時は非常ある電氣の刺撃に中りて仮令其れ塲にて即死せざる迄も氣絶して用ふ堪へざるに至るべしといふ左きば此兵器を帶ふるものい戰場ふて大なる便利と有するに相違なし又此發明者と同じ仕方ふて電氣をスチッキ及び蝙蝠傘等ふも仕掛くる見込の由あるが是も狂犬抔ふ遇ひたる時には都合善かるべく殊に電氣の力い心の儘ふ强くも弱くもすると得るに付人力車夫の惡情けたる時抔ふ一寸と此杖ふてつゝく抔も妙ならん云々と上海クーリエル新聞に見る

○獨逸軍艦南洋ふ經略す　四月十一日濠洲シドニー府發の報知に獨逸軍艦アルバトロース號は八ヶ月間各地巡航の末本日當地ふ來着せり同船は先にシドニーよりブリスバンを經てカロライン及ニウ アイルランドの諸嶋ふ赴くしが カロライン島は同艦の到りし前より同國砲艦イルチス號が既ふヤップ島に獨國の國旗を建て置ふたればアルバトロース號は其附島中の離れさる島々と巡行して諸所に其國旗を建て終りて再びブリスバンに戻り此處にて カウント パッヂ の名譽議員三名を選ふ番地ふ設立する 明治十年 Hy. Kiro. Chiro. 黑田清隆 Hy. Kiro. Chiro. 黑田清隆 Hy. Kiro. Chiro. 黑田清隆 と通り其次第を述ぶべし

○消毒藥調製　衛生試驗所ふて有する消毒藥調製の工風を以つて傳染病流行の時ふ當りて其中には戰闘の戰ひにてはアイルランドの土人及び其中には肥なるふ加へて頗るに困難を極めたるものは四十五名砲家屋小舟田畠等の多かりしと又戰爭の時ふ當りて其中には戰闘の爲めふ諸處ふ居留外國人を殺るに在りしが土人みふ又は軍艦の來る等の爲めふ諸處ふ居留外國人が居留外國人を殺るに在りしが土人みふ又は軍艦の來